

<翻訳・資料紹介>

W. タイス著 “ヤヌシュ・コルチャック 政治的肖像”

翻訳紹介 塚本 智宏¹⁾, 翻訳 鈴木 亜里²⁾

“Janusz Korczak : Political portrait” by Wiesław Theiss

Translated from the polish by Ari SUZUKI
with an introduction by Chihiro TSUKAMOTO

¹⁾名寄市立大学保健福祉学部教養教育部, ²⁾ワルシャワ大学教育学部大学院修士課程一年在学

Janusz Korczak (Henryk Goldszmit, 1879-1942) - a writer, an educator, a doctor and the director of an orphanage in Warsaw - was never involved in politics. It was politics and politicians who paid attention to Korczak (Old Doctor). In my (Wiesław Theiss) attempt to sketch a so-called political portrait of the Old Doctor, I am interested in the socio-political context of the perception of Korczak's heritage in Poland after 1945. I try to answer what was the role of “great” as well as “small” politics in the development of Korczak's image. In the first case, what I have in mind are official activities of the state and the political parties, and in the second - the activities of the particular communities and institutions.

One can distinguish 3 perspectives within Korczak's political portrait: martyrological, religious, and ideological. The first perspective presents Korczak on his way to death in the Nazi death-camp Treblinka. The Old Doctor is, in this case, almost always an object of a superficial cult. The second perspective concerns lively and never-ending debates and arguments on Korczak's creed. There are even those who believe that Korczak should be considered a saint. The ideological perspective uncovers the relationship between Korczak and communist propaganda. In this context, the attempts of taking over and using the name and heritage of Old Doctor by a monopolist ideology become clear*.

キーワード: コルチャック 政治的肖像 老博士 最後の行進 ガス室 聖人

W. タイス著論文「ヤヌシュ・コルチャック 政治的肖像」の翻訳紹介にあたって

塚本智宏

本稿は、W. タイス著「ヤヌシュ・コルチャック 政治的肖像」(『季刊教育学』、1994年、3号(通巻153号) (Wiesław Theiss, “Janusz Korczak:portret polityczny”, 《Kwartalnik Pedagogiczny》, 1994, nr. 3 (153)) の翻訳 (1994年エルサレムで開催された第5回国際コルチャック会議で発表した報告をもとに作成したもの) である。

本論文は、戦後ポーランドでのコルチャック像変遷史の一断面を示したものである。体制転換までのポーランドにおけるコルチャック像を政治、宗教、イデオロギーのそれぞれのパースペクティブにおいて考察している。わが国では一般にまだほとんど知られることのない議論、例えば「最後の行進」のそれを含めてコルチャック像をめぐる様々な議論が紹介されており、十数年前の論文とはいえ決して古くなっていない論文である。このたび著者にお願ひし邦訳紹介のご了解をいただいた次第である。

タイス教授のコルチャックに関する仕事について触れるなら、ポーランド国内で広く普及しているコルチャック原典の編纂『ヤヌシュ・コルチャック 子どもをいかに愛するか』(Janusz Korczak, Jak kochac dziecko, Warszawa, 1992, 1995, 1998, 2002, 2004)、並びに、ご夫人B. スモリンスカ・タイスさんとの共編著『ヤヌシュ・コルチャック 子どもをいかに愛するか、子どもの権利の尊重』(Janusz Korczak, Jak kochac dziecko / Prawo dziecka do szacunku, Barbara Smolinska-Theiss and Wiesław Theiss., Warszawa, 2002.) といったテキストに関する仕事がある。またコルチャックに関する国際会議の動向を紹介するいくつかの論文がある。ちなみにここに示した通りご夫人もコルチャック研究者の一人である。

タイス教授の略歴を示すと、1981年にグダニスク大学卒業・ワルシャワ大学博士課程進学、1990年にワルシャワ大学助教授、1996年に年ワルシャワ大学教授、1999年に同大学術教授となっている。現在、ワルシャワ大学教育学部(社会教育講座)教授。同講座での研究課題は、「地域社会の社会教育・文化・教育の理論と歴史」「極端な社会政治的条件のもとでの子ども期」、「カトリックの社会教育活動」であり、日本でいえば、学校外教育・児童福祉の複合領域の教育哲学・教育史といった領域である。主な単著では有名なポーランド社会教育学の創設者『ラドリンスカ』についての研究(1984, 1997)、また、日本との関係も深い『シベリアの子どもたち、1919-1923年のシベリアと満州からのポーランド引き揚げ者児童の歴史』(1991, 1992)、『強いられた子ども時代、極端な社会・政治的条件のもとでの社会化』(1996, 1999)といった研究がある。他に共著・編著多数あるが割愛させていただく。

なお、前掲英文要約は、本論文掲載誌(『季刊教育学』)の本人執筆のものを一部欠落を補充してそのまま本誌に転載したものである。

W. タイス著 “ヤヌシュ・コルチャック 政治的肖像”

ヤヌシュ・コルチャック (ヘンリク・ゴールドシュミット)¹は政治活動には関与していなかった。むしろ、政治や政治家に対して、嫌悪感や猜疑心を抱いていた。政治体制の変換が、子どもの運命の転換をもたらした子どもの被害や惨事を打ち破るとは信じていなかったのだ²。それらの感情は、しかしながら、報われなかった。というのは、政治や政治家は常にコルチャックに注目していたからだ。

1945年以降ポーランドでは、“大きな”政治の場だけでなく“小さな”政治の場においても、老博士の遺産への関心が見受けられた。前者の場合では、国家権力や政党の見解が浮き彫りになり、後者の場合では、ある特定地域や社会的諸機関の見地、また個人的な意見が浮かび上がってきた。多くの発言・評価・コメントの中に明確に表れている相異なる展望が交差する中で、ヤヌシュ・コルチャックの特定の人物像があらわになった。それは、あまりに多種多様で認識論的には興味深く、一貫性がなく内部では矛盾さえ示して、またその意味

においては時にドラマティックなそんな肖像であった。それは老博士に対する社会的イメージを示すものだが、これに加えて、子どもの教育や養育や世話とはほとんど関係のない別の目的達成のために、コルチャックという登場人物を直接・間接に介在させようとするものであった³。ここで政治的肖像と名づけたこの肖像は、受難的、宗教的、イデオロギイ的という主に三つの展望からなりたつことを了解されたい。

受難的肖像

ヤヌシュ・コルチャックは子どもたちと共に死に向かって歩いて行く—これはおそらく最も頻繁に繰り返されている老博士像であろう。この偉大な教育者の殉教は、20世紀の歴史の記憶に刻みこまれた。またほとんど世界中の人々の心と精神をとらえた。そして偉大で揺るぎない伝説の源となった。コルチャック伝説は一人歩きしている。それは至るところに存在し、その変種も多く、たくさんの意味を持っている。

第一人者とは言えば、いわゆる歴史の証言者と詩人にあるだろう。なぜなら彼らが、死と哀悼の色彩がヒロイズムや宗教やおとぎ話と混ざり合う、そういう老博士像をつくり始めたからだ。最も頻繁に引用されるのは、ナフム・レムバの報告である。彼の報告によると、1942年8月6日にワルシャワゲットー⁴の集積場（ウムシュラークプラッツ⁵）で起こった出来事とは次のようであった。「子どもたちは全員、四列になっていた。コルチャックはその先頭に立ち、顔を上げ、二人の子どもの手を取って列を率いた。第二部隊はステファニア・ヴィルチンスカが、第三部隊はプロニアトフスカが（彼女が率いている子どもたちは青色のリュックサックを背負っていた）、第四部隊はトファルダ（地名）にある施設出身のシュテルンフェルドが率いた[……]。警備隊すら用心深く立ち止まり、敬礼をした。ドイツ兵がコルチャックを見て尋ねた《あいつは誰だ?》と」⁶。あまり広く知られていないエドヴァルド・ガドムスキの回想録の中にも、この悲劇的な出来事に関して同様のことが詳細に書かれている。ガドムスキは次のように書いている。「…偶然、広場[ブシェワドゥンコヴィー —筆者タイス注]の片隅で、私はヤヌシュ・コルチャックに出会った…。彼は私に気づいた。落ち込んだ目をした青白い顔で、彼は苦笑いをした。そして黙った。本当はというと、話をする間もないほど短い時間であった。のどもとに言葉が詰まった。陰気な沈黙は、ありふれた言葉よりも意味深長であった。私には永遠ほどに感じられたその長いひとときの間、私たちはこのように立ち止まっていたのだ。私は冷や汗をぬぐった…。突然動き出した。はっきりしないのどに詰まるような響きが、かすれたわめき声や荒々しい銃声、叫び声やうめき声と混じり合った。《急げ》と急かされ、彼らは車両に近づいて行った。命令され、子どもたちは整列した。順番はコルチャックを先頭に、まずフレーベル派の教育者に率いられた最年少の子どもたちが、そしてその後年長者が続いた。移動が始まった。コルチャックはピンと張られた糸のように背筋を伸ばし、整然と兵隊のような足取りで進んだ。まるで道しるべにでもするかのように、節くれ立った杖を手にし、自分の運命に向かってゆっくりと歩いて行った。まっすぐ、そして勇ましく前をじっと見つめていた。やがてコルチャックの一团は車両に向かって行進している全体の列に加わった…」⁷。

マレク・ルドニツキの記録にはこれとは全く違った一時の様子が描かれている。「何か非常に大きな無気力感、機械的な動き、無感動といったような雰囲気が蔓延していた」と彼は思い起こす。「コルチャックの歩みに対して、目に見えてわかるような動揺も、（ある人たちが記述しているような）敬礼もなかった…。恐ろしいほどの沈黙、コルチャックは一步一步、足を引きずって歩いた…。私には、彼が《なぜだ》という言葉をつぶやいているように感じられた…」⁸。

ポーランド文学の中には老博士の“最後の行進”に関する記述がたくさんあるが、次に引用するような描写もまた存在する。この点に関するどんな比較にも、またどんな論争にも、根拠がない。ここでは、歴史的真相が個人の記憶に劣ってしまうのだ。しかしながらこれは、例えばワルシャワゲットーの有様を別の所から鋭く観察しているはずのメアリー・ベルグの報告にあるような、明らかな嘘やでたらめを大目に見るということの意味するのではない。彼女は、いわゆる世論に訴えながら、ゲットーにおけるコルチャックの運命に関して誤った情報をいくつか流したのである。その中でも特に注目すべきものは、老博士とその教え子たちはワルシャワのユダヤ人墓地で撃ち殺されたという見解である⁹。しかし、この筆者には読者を騙そうという意図はなかつ

たので、この情報はむしろ伝説の世界に属するように思われる。

また別の時には、いわゆるコルチャックに関する歴史的真実は、芸術家の想像の背後に沈むことになる。イザベラ・ゲルバード（チャイカ）は1942年の秋にすでに『ヤヌシュ・コルチャックに関する哀悼の歌』を書いた。その中にとりわけ次のような言葉があった。「ヤヌシュ・コルチャックはゴルゴタ（エルサレム郊外にある丘でキリストはりつけの地）への道を歩いて行った」。アントニ・スウォニムスキはこれに付け足して次のように書いた。「[コルチャックは]苦勞して十字架をゴルゴタに運んだ、処刑場に行くのだ、自らの意思で」¹⁰。

ヤヌシュ・コルチャックの英雄的態度は、社会の記憶の対象となって私たちの時代の歴史に刻まれるその前に、ワルシャワゲッターの根絶に加わった人たちによって利用された。次にあげるのは、これまでコルチャック文学にはなかった、ユダヤ人警察の医者であるヘンリク・マコヴェルの回想記録である。「[コルチャックとその教え子たちが搬送された—タイス注]次の日、積み込みには別の寄宿寮が割り当てられた。私はウムシュラークにいた…。子どもたちと一緒に立っていた若く格好の良い女性看護婦の一人が…、職員も子どもたちと一緒に行かなければならないのか、と尋ねた。すると、きっぱりとした冷めた返事が返ってきた。《コルチャック博士があなたたちに道を示したでしょう》。彼女は恥ずかしくなった。そして、道中またその後も子どもたちの世話をするために、彼女は何も言わず他の看護婦たちと一緒に進んでいったのだった」¹¹。以上に引用した出来事は、象徴的には何を意味したのだろうか。悲劇的パラドックスか、それともジグムント・バウマンの言葉をかりて次のように言うことができるなら¹²、絶滅目的の社会工学の合理的要素なのか。おそらく前者でもあり、後者でもあるだろう。しかしこの出来事の真意は、それ以上のことを意味している。老博士の名前は、あの状況の中では故意の濫用の手段となったようだ。それは極端な濫用であった。もしかしたら、まさにその時、あの劇的な状況の中で、控え目に言って様々な正当化のためにコルチャックの名前を利用するプロセスが始まったのかもしれない。

コルチャックの殉教死とその神話をめぐって起こったことは、あらゆる神話がそうであるように、様々な考えや価値、熱意の反映である¹³。これらの見解の共通分母を見つけるのは難しい。それらは多様で、不完全で、うまく和解し合えないのだ。「コルチャックは死んだ。私たちもまた自分自身のヴェステルプラッテ（第二次世界大戦勃発の地）を持つために」と、詩人のヴワディスワフ・シレンゲルは述べた¹⁴。これは重要な言葉である。枢機卿（ローマ教皇に次ぐ行政職—訳者注）のステファン・ヴィシンスキはこれに注目して、打ち明ける。「私の意見では、それぞれの国民の精神的成長にとって不可欠な、何か大きな真実がここに含まれている」¹⁵。評論家カジミェシュ・コジニエフスキの邪悪心がこの二つの崇高な発言に対立した。彼によれば、老博士は今日的欠陥やコンプレックスのセラピストであるという。「もしヤヌシュ・コルチャックを崇拝しているというなら（とコジニエフスキは説明する）、決して叶えられることのなかった彼の願望を崇拝し、十分に果たされることのなかった彼の責任を崇拝し、そして彼の道徳的苦境を崇拝しているということだ」¹⁶。

ヤヌシュ・コルチャックの死は、ショアーの闇の中で続いて起こった¹⁷。このグローバルな展望の中では、個人の運命だけでなく、この上ない英雄的行為さえも消えている。このように絶滅の時代を生きぬいた人たちは言っている。女医のアディナ・ブランディ・シュファイゲルや、また医者であり第二次世界大戦中はワルシャワのユダヤ軍事組織の指揮官の一員であったマレク・エデルマンは、老博士の死はある特別な姿の結果ではなく、むしろ義務の帰結であったと考えている。彼らによれば、コルチャックにはそれ以外の道はなかったのだと。そうせざるを得ない状況が彼にそうさせたのだ。あるいはこうも理解できる、義務を果たすことが英雄的行為であると、そう彼らは付け加えた。しかしながらコルチャックだけがその当時の英雄だったのではない。マレク・エデルマンは躊躇することなく次のように述べた。「私はコルチャックと同じような、そしてそれよりもはるかに素晴らしい行為をした若くて健康で美しい20名の女性を知っている。しかし彼には、本を書いたり、その他様々な活動をしたりして、名声があった」¹⁸。

今日発言権を持つようになってきている世代は、戦争中の劇的混乱や答えのない問いに縛られることはない。若者たちは戦火時代がどういうものであったかを知ってはいるものの、より一般的な型に基づいて未来を見つめている。彼らは、祖父や父親たちが見なかったことに気づくことがしばしばある。ワルシャワ大学教育学部

の授業でヤヌシュ・コルチャックの作品について討論している時、20代の女学生が次のように述べた。「コルチャックについて書くことができません。私の意識の中に彼はまるで全く存在していないように感じます…。私の頭の中でコルチャック像を形づくっている、悲しみや老い、どんより感、貧困や空腹、ガス室といったものが原因のように思います。私の目に彼は、天気の良い日にワルシャワの街をぶらぶら歩いている若者としてではなく、みすぼらしい子どもたちに囲まれてガス室に行ってしまった老人として映っているのです…」¹⁹。

宗教的肖像

この肖像の中心テーマは、老博士の宗教性に関する問いである。様々な世界観、宗教、民族の代表者がこのテーマについて自分の意見を述べている。そのため多数の意見、対立する意見がある。ヤヌシュ・コルチャックはどの宗派にも属していなかったという人たちがいる一方で、彼の宗教的態度を認め、それを強調している人たちもいる。またこの偉大な教育者を聖人に加えようという意見もある。

こういった意見が交差する中で“非教会の聖人”という表現に関心が集まっている。この呼び方によって老博士が定義されたのはすでに半世紀も前のことだ²⁰。これが妥協可能な見解であったと、今日では思われる。コルチャックの殉教と死に対する非教会的見解と宗教的見解は和解しようと努めてきた。また同様の意味を持つものに“聖人的人間”という表現がある。この二つの表現において、老博士は様々な境界線やハードルを超越している。つまり、“普通の人間”であると同時に“天才的な教育者”であり、また“ユダヤ人”であると同時に“キリスト教徒”であり、さらに“無宗派”であると同時に“最も高潔な姿をした聖人”であるのだ。

コルチャック—“非教会的聖人”—は、独特の特徴をもち、世界のために特別かつ最高の手柄をたてた人たちの仲間に入るだろう。それは通常、英雄性とその偉大な行為という特徴をそなえた伝説に対して約束された場所である。しかしながらここでは、現実的見解が優位を占めている。コルチャック博士の偉大さの源は、平凡さ、人間らしさにあった、と人々は強調する。他者に対する無条件の奉仕が彼の力の源であったのだ。彼は、誰の助けも期待することができなかつた人たち、つまり孤児たちを助けた。この奉仕のために、彼はこの世の幸せを諦めるだけでなく、“自ら完全な施しを与えた”。これは聖人だけがもっている特権である。このように述べた筆者、作家であり評論家でもあるイレナ・クシヴィツカは、コルチャックに関する意見の中で、さらにその先に及んだ。彼女は彼を“現代のアッシジ出身の聖人フランチェスコ”（フランチェスコ修道会の創立者でイタリア中部のアッシジ出身—訳者）と名付けたのだ²¹。

このような崇高な言葉には、ときおり全く嘘の情報やよく理解できない意図が伴うものだ。先の筆者は、おそらくコルチャックから尊大さを奪いたかつたのだろう、ただ“たくさんの犯罪者を生み出した”ことに他ならない教育システムをつくったとして彼を非難した²²。後にも先にもヤヌシュ・コルチャックについてこれと同じような言葉を発した人は、誰一人としていなかった。また、すでに引用したカジミェシュ・コジニエフスキの他には、コルチャックの“神聖さ”をアウシュヴィッツの殉教者である聖人マキシミリアン・コルベの生涯以上に取り立てようとした人は誰もいなかった²³。

老博士 — この“最も真実味ある聖人” — は普遍的な人物である。カトリック教会もまた、彼の死が英雄的行為であったことを認め、それを強調している。ヨハネ・パウロⅡ世は次のように述べた。「今日の世界にとってヤヌシュ・コルチャックは宗教と道徳のシンボルである」²⁴。1983年6月18日に、ウムシュラクプラッツ（ここからヒトラー信望者たちはコルチャックとその教え子たちをトレブリンカに送った）の近くにあるワルシャワゲットー記念碑の前で、教皇はお祈りを捧げた。また神父であり詩人でもあるヤン・トファルドフスキもこれと同様の発言をした。「[コルチャックは]形式的にはイエス・キリストの洗礼とは無縁だったが、私たちキリスト教徒は彼の生き様や死から多くのことを学ぶことができるだろう」²⁵。しかしながら、これらの意見の中で一番先を行ったのは、ワルシャワ新聞の評論家であった。彼は最近、コルチャックを“トレブリンカ出身の聖人ヤヌシュ”と名付けたのだ²⁶。

事実にしるそうでないにしろ、老博士とカトリックの伝統を結びつけることが、深刻な論争のもとになっていることが時々ある。コルチャックの映画をつくったアンジェイ・ワイダがこれを認めた。彼は、老博士の“列

聖”は予定していなかったと述べた。明快な道徳的選択と受け入れた原理に対する忠誠を、自身の映画の中で表現したかったのだ、と。「老博士の古めかしい教育的理想が広い範囲で馬鹿にされ非難される一方で、概念の全般的な混乱が、世界を、全てを理解しすぎている知識人と身の回りで何が起きているのか全くわかっていない人に二分している、そんな時代に、私はこの映画を作りたい」と彼は打ち明けた²⁷。しかしながら、これは攻撃から作品を守ることはなかった。批判者の一部は、映画は老博士の死の意味を歪め、彼のキリスト化を試みている、と述べた²⁸。

イデオロギー的肖像

ヤヌシュ・コルチャックのイデオロギー的肖像は、曲がりくねった道以外の何ものでもなく、極端に異なる見解の間で現れたり消えたりしている。この肖像は過去半世紀のポーランドのそれぞれの政治状況に左右された。この肖像は過去も現在も非常に対照的なものであった。老博士という人物や彼の考えに対する賞賛だけでなく、この教育学者の排除と忘却を強いる審判もこの肖像の中に見てとれる。

かつて“ドム・シェロット”でコルチャックと一緒に働いていたミハウ・ヴルブレフスキによれば、1945年以降、老博士に対する態度は明らかに好意的であったという²⁹。彼は優れたポーランド人大作家、教育者とみなされていた。1946年10月、当時、左派のポーランド社会主義党と連結していた組織、子どもの友労働者協会 (Robotnicze Towarzystwo Przyjaciół Dzieci、略称RTPD) の中で、後にポーランドコルチャック協会 (Polskie Towarzystwo Korczakowskie) となるヤヌシュ・コルチャックの記憶を称える委員会が設立された³⁰。有名な啓蒙活動家スタニスワフ・ジェミスがこの組織の筆頭に立った。自分の маниフェスト分野において作家でもある彼は、その中でとりわけ次のように述べている。「…RTPDは、子どもに対する崇高な奉仕におけるヤヌシュ・コルチャックの考えと遺産の相続者、継承者になりたいと感じている。RTPDは、あらゆる労働者、あらゆる活動家たちの心の内に、子どもに果てしなく与えられる無償の愛というこの神聖な火を燃え立たせ、それを保ち続けることを切望している。ポーランド教育学の歴史は、ヤヌシュ・コルチャック先生という人物の中に、…美しい1ページを手に入れている。偉大な心に誉れあれ！」³¹。

新しく立ち上がった協会は、老博士という人物や彼の教育学的遺産をただじっくり見つめただけではなかった。コルチャックの記念碑を建てる計画やこの教育学者の伝記映画を作る計画を立てただけでなく、孤児院で働く将来の教育者たちのために奨学金制度を設けることや、バルトシツェにあるRTPDの教育施設を“コルチャコーヴォ”と称することを望んだ。この最後の計画は少し変更され、バルトシツェの施設はヤヌシュ・コルチャックという名を採用した。しかしより重要なことは、RTPDの活動家たちが明白かつ断固として社会主義的教育やマルクス主義的教育学の方針を支持したということ³²、それゆえ老博士の遺産を批判的な目で見直そうとしたということである。彼らはコルチャックの小市民的理想主義や“子ども独特の世界”の形成、そして、これは非難というよりも、むしろ事実確認であったが、老博士が用いた特異な方法を非難した。その結果、次のように記述されている。「…私たちは、コルチャック式の果てしない人間への愛情を補いたいと望んでいる、…人間を社会主義的に解放することで…」³³。このようなタイプの簡潔表現は、1947年春に教育省内にある委員会が行ったRTPDの監査事業の間接的結果であったのかもしれない。その当時協会 (RTPD) はとりわけ次のように非難された。「厳密に表現された教育理論の欠如。このため、主に《労働者階級のイデオロギーの精神に基づく教育》分野において、つまらない一般論が用いられている。中でもコルチャックのシステムをモデルとして採用することは、批判的思想の欠如を示している…」³⁴。

ヤヌシュ・コルチャックを公式に認める態度は、基本的にスターリン時代(1949-1956)に変化した。その時、明らかに彼はいわゆるブルジョア的思想家の役に左遷されたのだが、これは理論においてだけでなく教育実践においてもこの教育者が存在しないことを意味した³⁵。かつて一緒に働いていた仲間たちさえも彼に背を向けた。「コルチャックのシステムに対して私がどのような疑いを抱いていたか、またドム・シェロットで働きながらどのような疑いを表現したか、…こういったことが、戦前、政治的抗議や不信任決議として世に響き渡った」と1953年にアレクサンデル・レヴィンは報告した³⁶。しかしながら、当時レーニンやスターリン、毛沢

東のいわゆる革命的思想を訴える社会主義的教育学者たちは、コルチャックを徹底的に排除したかったわけではない。彼らはそれまでの試みを続行しながら、老博士とソビエトの教育学者アンソニー・マカレンコの見解に同一性や関係性を見出そうとした。また“若い”コルチャックと“老いた”コルチャックを綿密に区別する努力もなされた。前者は1905年の革命に好意的で、教育分野の進歩的伝統を協同創始したコルチャックである。後者は“社会的争いを避け”、時代遅れの考えを代表し、“首尾一貫して社会主義の土台を作った”人たちを支持することができなかつたコルチャックである³⁷。

1954年、先延ばしにされていた言わば判決が実施されるに至った。ヤヌシュ・コルチャックの本のいくつかが共産主義体制に反するものとみなされ、学校図書館から排除されることになったのだ。これは教育省の学校図書館・教育図書館の文献選抜・精選委員会 (Komisja Doboru i Selekcji Książek w Bibliotekach Szkolnych i Pedagogicznych Ministerstwa Oświaty) の委任を受けて働いている批評家・検閲官の要請であった。学校と生徒のイデオロギーの純粋性を気にかけているこの専門家たちは、以下にあげる老博士の出版物を敵対するものに加えた。「幼いヂェクの破産」、「ユスキ・ヤシキ・フランキ」、「子どもの権利の尊重」。これまで一度も刊行されることがなく、世に知られていなかった論評の中で、唯一正当なイデオロギーを支持している人たちが、以下のような論拠をあげた。「…コルチャックの小冊子は、1) 子どもが受ける被害の階級的原因を示していない、2) ブルジョアジーとそのイデオロギーの批難の受け手を把握していない、3) 集団から切り離れた状態で子どもの自由や市民権を認めている、4) 子どもとの肯定的な関わり方に実現可能な形態を与えるような指示の方針を示していない…。したがって、学術図書館にだけは、高潔だが歴史の仕組みを知らず、自身の最も誠実な行動において階級的に限界づけられた一個人の無力さを示す文書として、この作品を置くべきである。生徒や教師用の図書館、それに公共の図書館など、他のあらゆる図書館からはコルチャックの小冊子を撤収すべきである」³⁸。この宣告は、ヤヌシュ・コルチャックの主要作品であり、ヨーロッパだけでなく世界中で20世紀の教育学的文献の模範となったエッセイ「子どもの権利の尊重」に関するものである。

その当時コルチャックに関する記憶と共に起こったことを、マティルダ・テムキンの所見はよく描き出している。戦前、彼女はヤヌシュ・コルチャックとイダ・メルジャンの仕事仲間であった。1956年にポーランドに帰ってきた後、彼女は老博士の足跡を探し始め、廃墟を見つけ出した。それは単なる焼けてしまった建物の灰ではなかった。クロフマルナ通りの有名な“ドム・シェロット”には、ジャーナリストの学校があった。以前コルチャックがいたことを示す痕跡は何も、小さな記念碑すらどこにもなかった。また別の場所、老博士の教え子たちの休暇村であったゴツワヴェクは、身体障害者連盟が所有していた。建物の内の一つは鍛冶工場となっており、果樹園は周辺住民のための家庭菜園に割り当てられていた³⁹。

1956年秋、ポーランドに一時的な政治の自由が訪れた。そして過去に侮辱を受けた人々の名誉回復が行われた。老博士の遺産にとって良い時代がやってきたのであった。子どもの友協会 (Towarzystwo Przyjaciół Dzieci、略称TPD) のもとで復活したコルチャック委員会が再び活動し始めた。コルチャックの書いた本が出版され始めると同時に、コルチャックに関する出版物もみられるようになった。この活動は、国家権力と党権力の公的支援を得た。しまいにはコルチャックセンター設立に関する請願書が提出された⁴⁰。

続く歴史の局面は1968年のことである。中東戦争の結果、ワルシャワとテル・アヴィブとの関係が断たれたのだ。セム系民族迫害の場にヤヌシュ・コルチャックはいた。そのため、コルチャック協会は再び閉鎖され、そこで活動していた人たちの数名はポーランドからの亡命を余儀なくされた。その中には前述のミハウ・ヴルブレフスキもいた⁴¹。その当時の出来事が、もしかすると今日、疑いの反動を引き起こしているのかもしれない。「これで[1968年に一筆者タイス注]ヤヌシュ・コルチャック自身が、厳密には彼の伝説が、ポーランド人民共和国の敵となってしまったのだ。彼の本当の名字がゴールドシュミットだったという理由だけで」⁴²。

70年代、現実的社会主義の安定化が進み、反セム主義の暴動が沈静に向かうと、ヤヌシュ・コルチャックという人物と彼の思想への関心の新たな成長が可能となった。1978年にこの活気がピークに達した。ちょうどコルチャック博士生誕100周年を迎えたことが、この年をいわゆるコルチャック年 (Rok Korczakowski) に任命する機会となったのだ。またこの記念すべき年はユネスコの国際カレンダーにも記録された。いわばこれはコル

チャックの思想と業績を思い起こさせ、広く普及させる、自然でかつ政治的には中立な立場の機会であった。彼がつくりあげた“愛の教育学”の今日性を示すことを望んだと同時に、私たちの時代の最も偉大な思想家の一人である彼に敬意を表したかったのだ。

また次のようなことも起こった。コルチャック年の祝賀によって老博士の業績に対する関心が目覚ましい成長を遂げた⁴³。この式典で最高の盛り上がりを見せたのは、国際学術会議「ヤヌシュ・コルチャックの生涯と業績」(1978年10月12-15日)であった。これは老博士をめぐる論争の終結を少しも意味するものではなかった。それとは全く逆に、“コルチャックに対する権利”に関して衝突するという、新しい段階が明白となったのだ。この会議の主催者、参加者の一部はコルチャックの考えとマルクス主義的イデオロギーとを結びつけたが、別の人々は反対に、老博士の思想と社会主義との関係が非常にゆるいことを非難した。

この問題に関して、詩人・散文作家のヘンリク・グリーンバーグは全く別の立場に立った。前述の会議の何年か後、彼は東欧諸国からコルチャック式典に参加した人たちが、老博士の思想と社会主義版イデオロギック的教育学の目的との間にある違いに気づいていないとして批判した。結論として彼は次のように述べた。「…コルチャックは子どもに対する身体的・精神的暴力を徹底的に敵視していた。特に国家、宗教、社会階級に利益をもたらすようなモデルに従って子どもを育てる上げることに反対していたのだ。そんな彼には共産主義体制下のポーランドで実践する権利は間違いなくなかったであろう…」⁴⁴。引用したこの意見の背後には、認識論上のジレンマや道徳的・実践的なより広いジレンマが潜んでいる。以上のように述べた筆者は、率直ではないが、教育に関するこれほど極端な考え方の二つ、つまりイデオロギック的教育学とヤヌシュ・コルチャックの人文主義的教育学をどのように結びつけることができたのかを問うている。この手続きの動機は様々であったに違いない。今日でも完全な答えに至るにはまだ早すぎる。ポーランドにおけるいわゆる社会主義的教育学の分析と評価が不可欠である。このテーマに関する研究はようやく始まったばかりなのだ。

ブロニスワフ・バチコの表現をかりれば、老博士は昔も今象徴的な人物であると言うことができるだろう。コルチャックの名前と思想は、例えて言えば、学問分野、社会分野、政治分野といった様々な立場に立つ支持者の旗に表れた。これはしばしばコルチャック博士の遺産の本質と明瞭な関係を持たずに起こった。時には彼が取り組んできたことや発言したことに反することさえあった。これら全ての風潮や活動あるいは状況といったものは、老博士を二つの基本的な文脈の中に置いた。ある時は、それは偉大で崇高で、奥深く人間的なものの次元、またこの世の生の営みの境界を超越したものの次元であった。また別の時は、小さく表面的で、その場限りのものの領域であった。

老博士という人物は容易く“列聖する”ことができる。1958年当時、新たに発行されたコルチャックの作品や彼に関する出版物の批評家であったヴァンダ・レオポルドは、その時すでにこれに気づいていた⁴⁵。この偉大な教育学者に対する一面的陶醉は、コルチャックが生き生きしているところでは“甘美な国民的聖人”が現れることの原因になるかもしれない、と彼女は付け加えた。私たちの国には今もこのような風潮が明らかにある。社会の認識においては、まずコルチャックがポーランド人とユダヤ人との関係の象徴であり、コルチャックは殉教者であり、コルチャックは記念碑である、とそう現在受け入れられている。最近雑誌に掲載された“老博士を復活させるのは誰か?”という叫びは、コルチャックを神話化しようとする様々な試みに対する抗議であった⁴⁶。

ヤヌシュ・コルチャックの社会的な肖像は、例えば次にあげるような漠然とした定義が斟酌されている、“不屈の騎士”、“屈しない人”、“無敵の人間”[?—筆者]、“大きな器量の持ち主”、“善良な老博士”、“本物の人間”、“反乱者、夢想家”、“気高き出自”。この社会的な肖像の中には、老博士の子どもとの関わり方に着目した定義も欠けてはいない。それは例えば、“他人の子どもの父”、“子どもの慈善家”、“子どもの協力者”、“子どもの詩人”、“子どもの献身的な親友”、“子どもの熱心な世話係り”、“子どもの偉大な親友”、“子どもの権利の先駆者の宣伝者”である。このような表現のコーラスが調和していないということに容易に気づくだろう。確かな称賛とヤヌシュ・コルチャックに対する尊敬の念が、恩着せがましい態度や疑わしい美学の旋律と結びついて

いるのだ。

コルチャックという人物は、過去半世紀のポーランドで蓄積されてきた記憶の中に、はっきりと存在した。この肖像はある一定の歴史的・社会的物の中で現れ、形成されてきた。そしてそれは世界観の様々な展望を映し出した。その結果、ある時は和気あいあいとした対談をするために、またある時は論争や衝突の火花が散る中で、また時にはその情報や判断を仲介するために、老博士の特定の肖像が現れ始めたのだ。この肖像は、内容豊かで、複雑で、躍動的である。そして20世紀後半に私たちの国で起こったことをかなり忠実に反映している。きっと将来においても、ヤヌシュ・コルチャック先生に対する社会の認識に新たな特徴と新たな色彩がもたらされるであろう。

注

- 1 参照：Maria Falkowska, Kalendarz życia, działalności i twórczości Janusza Korczaka, Nasza Księgarnia, Warszawa 1989 マリア・ファルコフスカ『ヤヌシュ・コルチャックの生涯、事業、創作の暦』、私たちの書店、ワルシャワ1989年；Marzena Kostka (oprac.), Janusz Korczak. Bibliografia publikacji Janusza Korczaka i o Januszu Korczaku w Polsce. 1943-1987, Agentur Dieck, Heinsberg 1988 マジェナ・コストカ（論文）『ヤヌシュ・コルチャック—1943～1987年にポーランドで出版されたヤヌシュ・コルチャックの文献およびヤヌシュ・コルチャックに関する文献の目録』、Agentur Dieck, ハイデンベルグ 1988年；Betty Jean Lifton, The King of Children. A Biography of Janusz Korczak, Schocken Books, New York 1988 ベティ・ジーン・リフトン『子どもたちの王様—ヤヌシュ・コルチャックの伝記』、Schocken Books、ニューヨーク1988年；Janusz Tarnowski, Janusz Korczak dzisiaj, Akademia Teologii Katolickiej, Warszawa 1990 ヤヌシュ・タルノフスキ『今日のヤヌシュ・コルチャック』、カトリック神学校、ワルシャワ1990年；Stefan Wołoszyn, Korczak, Wiedza Powszechna, Warszawa 1978 ステファン・ヴォウオシン『コルチャック』、一般的知識、ワルシャワ1978年
- 2 参照：Irena Chmieleńska, Janusz Korczak, "Kuznica" 1948 nr 40 i 41 イレナ・フミエレインスカ「ヤヌシュ・コルチャック」、雑誌“製鉄工場”1948年40, 41号
- 3 1945年以降、カジミエシュ・デンブニツキがポーランドで初めて、様々な社会的・政治的文脈におけるヤヌシュ・コルチャックの名と彼の遺産の出現に注目した。参照：Kazimierz Dębicki, Korczak z bliska, Ludowa Spółdzielnia Wydawnicza, Warszawa 1985 カジミエシュ・デンブニツキ『コルチャックの詳細』、人民協同組合出版、ワルシャワ1985年；Michał Wróblewski, Janusz Korczak im schiefen Licht?, w: Friedhelm Beiner (Hrsg.), Janusz Korczak. Pädagogik der Achtung. Tagungsband zum Dritten Internationalen Wuppertaler Korczak-Kolloquium, Agentur Dieck, Wuppertal 1986, ss. 204-212 ミハウ・ヴルブレフスキ「斜光に照らされるヤヌシュ・コルチャック」、フリードヘルム ヴァイナー編『ヤヌシュ・コルチャック。尊敬の教育学、ヴッパータル国際コルチャックコロキウム大会記録』、ディーク社、ヴッパータル、1986年の204-212ページより。
- 4 参照：Marian Fuks (oprac.), Adama Czerniakowa dziennik getta warszawskiego. 6 IX 1939 - 23 VII 1942, PWN, Warszawa 1983 マリアン・フクス（論文）『アダム・チェルニアクフのワルシャワゲットー日記。1939年9月6日～1942年7月23日』、PWN、ワルシャワ1983年；Władysław Bartoszewski, Los Żydów Warszawy 1939-1943, wyd. II, Puls, Londyn 1988 ヴワディスワフ・バルトシェフスキ『ワルシャワのユダヤ人の運命。1939年～1943年』第二版、鼓動、ロンドン1988年；Teresa Prekerowa, Konspiracyjna Rada Pomocy Żydom w Warszawie 1942-1945, PIW, Warszawa 1982 テレサ・プレケロヴァ『ワルシャワの地下組織、ユダヤ人救済評議会 1942年～1945年』、PIW、ワルシャワ1982年；Artur Eisenbach (red.), Emanuel Ringelblum, Kronika getta warszawskiego. Wrzesień 1939 - styczeń 1943, Czytelnik, Warszawa 1988 アルトゥル・アイゼンバッハ（編集）エマヌエル・リンゲルブルム『ワルシャワゲットー年代記。1939年9月～1943年1月』、購読者、ワルシャワ1988年。
- 5 ヤロスワフ・マレク・リムキエヴィチは次のように述べている。「ウムシュラクプラッツという名前は、おそらく戦争が始まってから使われるようになったと思われる。ブウォインスカ通りとヅカ通りに沿って敷かれている鉄道の待避線が伸びている反対側からスタフカ通り4-8までの広場は、戦前プシェワドゥンコヴィ広場と呼ばれていた[...]。誰がウムシュラクプラッツと名付けたのかという問いに答えるのは難しいが、おそらくドイツ兵だと思われる。戦争が始まった最初の年にはもうすでにその名前が用いられていたであろうが、いずれにせよそれは1942年7月の大虐殺よりも前であったと思われる[...]。今日ではワルシャワでプシェワドゥンコヴィ広場と呼ぶ人は誰もいない。その敷地 — つまり

それを意味する言葉 — は、時を経るにつれ、ある象徴的な価値を獲得した、と説明づけることができよう。ウムシュラークプラッツとは、ワルシャワのスタフカ通り沿いの特定の場所をさす名称というだけではない。精神のある領域の、もしくは運命のと言った方がいいかもしれないが、これはそういったものの名称でもある。ウムシュラークとはすなわち、奈落の底(limbo)、死への玄関口、地下への入り口であった。ウムシュラークとは、そこにいた人たちに起こった出来事であった。」参照：Jarosław Marek Rymkiewicz, Umschlagplatz, „JMJ”, Gdańsk 1992, s.31 ヤロスワフ・マレク・リムキェヴィチ「ウムシュラークプラッツ」、雑誌“JMJ”、グダンスク1992年、31ページ

- 6 前述のマリア・ファルコフスカの文献(1)372ページからの引用
- 7 Edward Gadomski, Kres wędrówki Janusza Korczaka, „Biuletyn RTPD” 1947 nr 2-3 エドヴァルド・ガドムスキ「ヤヌシユ・コルチャックの放浪の果て」、雑誌“RTPD紀要”1947年2-3号
- 8 Marek Rudnicki, Ostatnia droga Janusza Korczaka, „Tygodnik Powszechny” 1988 nr 45 マレク・ルドニツキ「ヤヌシユ・コルチャックの最後の道」、雑誌“一般的週刊誌”1988年45号
- 9 Mary Berg, Dziennik z getta warszawskiego, Czytelnik, Warszawa 1983, s.186 メアリー・バーグ『ワルシャワゲッターからの日記』、購読者、ワルシャワ1983年、186ページ
- 10 Izabela Gelbard (Czajka), Pieśń żałobna o Januszu Korczaku, イザベラ・ゲルバード(チャイカ)「ヤヌシユ・コルチャックに関する哀悼の歌」; Antoni Słonimski, Pieśń o Januszu Korczaku, アントニ・スウォニムスキ「ヤヌシユ・コルチャックに関する歌」、w: Alicja Szlązakowa (oprac.), Janusz Korczak w legendzie poetyckiej, Interlibro, Warszawa 1992, ss. 71, 154 アリツィア・シロンザコヴァ(論文)『詩的伝説の中のヤヌシユ・コルチャック』、インテルリブロ、ワルシャワ1992年、71、154ページより
- 11 Henryk Makower, Pamiętnik z getta warszawskiego. Październik 1940 - styczeń 1943, Z.N. im. Ossolińskich, Wrocław 1987, s. 78 ヘンリク・マコヴェル『ワルシャワゲッターからの日記—1940年10月~1943年1月』、Z.N. オスソリンスキ記念、ヴロツワフ1987年、78ページ
- 12 Zygmunt Bauman, Nowoczesność i zagłada, Biblioteka Kwartalnika Masada, Warszawa 1992 ジグムント・バウマン『現代性と絶滅』、マサダ季刊誌図書、ワルシャワ1992年
- 13 参照：Henryk Samsonowicz, Mity w świadomości historycznej Polaków, w: Antonina Kłoskowska (red.), Oblicza polskości, Uniwersytet Warszawski, Warszawa 1990, ss.152-161 ヘンリク・サムソノヴィチ「ポーランド人の歴史的意識の中にある神話」、アントニナ・クウォスコフスカ(編集)『ポーランド人的特徴』、ワルシャワ大学、ワルシャワ1990年、152~161ページより；および、Bronisław Baczko, Rousseau w Panteonie, w: Bronisław Baczko, Wyobrażenia społeczne. Szkice o nadziei i pamięci zbiorowej, PWN, Warszawa 1994, ss.250-269 ブロニスワフ・バチコ「パンテロンのルソー」、：ブロニスワフ・バチコ『社会認識。集团的希望と記憶に関するスケッチ』、PWN、ワルシャワ1994年、250~269ページより；Jan Szczepański, Pamięć, „Odra” 1986 nr 3 ヤン・シチェパンスキ「記憶」、雑誌“オードラ”1986年3号
- 14 Władysław Szlengel, Kartka z dziennika „akcji” 10 sierpnia, w: A. Szlązakowa, op. cit., s.163 ヴワディスワフ・シレンゲル「8月10日の“出来事”に関する日記の一頁」、前述したA. シロンザコヴァの論文(10)163ページより
- 15 Nieznany list Prymasa Wyszyńskiego do wychowanka Janusza Korczaka [Israela Zyngmana], do druku podał Ryszard Wasita, „Tygodnik Powszechny” 1990 nr 27 「ヤヌシユ・コルチャックの教え子にあてたプリマス・ヴィシンスキの知られざる手紙[イスラエル・ズィングマン]」、リチャード・ヴァンスタが、雑誌“一般的週刊誌”1990年27号に投稿した
- 16 Kazimierz Koźniewski, Mit Starego Doktora, „Literatura” 1977 nr 33 カジミェシュ・コジニエフスキ「老博士の神話」、雑誌“文学”1977年33号
- 17 参照「ユダヤ主義—シヨア—キリスト教」、雑誌“形跡”1991年5号：(Judaizm – Szoa – Chrześcijaństwo, „Znak” 1991 nr 5)
- 18 Adina Blady – Sz wajgier, Tak naprawdę – w 1942 roku wyszłam z domu i nigdy do niego nie wróciłam, w: Anka Grupińska, Po kole. Rozmowy z żydowskimi żołnierzami, Wyd. „Alfa”, Warszawa 1991, ss.193-195 アディナ・ブラディ・シュファイゲル『本当に、私は1942年に家を出て、一度も帰らなかった』、アンカ・グルピンスカ『社会をめぐって。ユダヤ人兵士たちとの対談』、“アルファ”出版、ワルシャワ1991年、193-195ページ；Marek Edelman, Co było znaczące w getcie? - Nic! Nic! Nie mówcie bzdur!, w: tamże, s. 19 マレック・エデルマン「ゲッターでは何が重要であったか?—何も! 何もだ! つまらないことを言うな!」、同上19ページより
- 19 筆者W. タイスのコレクションの中にある執筆記録
- 20 Irena Krzywicka, Niekościelny święty, „Robotnik” 1947 nr 93 イレナ・クシヴィツカ「非教会的聖人」、雑誌“労働者”1947年93号
- 21 Irena Krzywicka, Oto człowiek, „Nowiny Literackie” 1947 nr 10 イレナ・クシヴィツカ「これが人間」、雑誌“文学ニ

- ユース” 1947年10号、またIrena Krzywicka, *Wielcy i niewielcy*, Czytelnik, Warszawa 1960, ss. 229-238 イレナ・クシヴィツカ『偉大な人たちとそうでない人たち』、購読者、ワルシャワ1960年、229-238ページにも掲載
- 2 2 同上
- 2 3 前述したカジミェシュ・コジニエフスキの論文(16)より
- 2 4 前述したヤヌシュ・タルノフスキの論文 (1)、98ページより引用
- 2 5 同上の文献より引用
- 2 6 Jonasz, Święty Janusz z Treblinki, „Gazeta Świąteczna” (dodatek „Gazety Wyborczej”) 1991 z dn. 17 VIII ヨナシ「トレブレリンカ出身の聖人ヤヌシュ」、 “祝日新聞” (“選挙新聞” の付録) 1991年8月17日付
- 2 7 Andrzej Wajda, Dlaczego Korczak?, „Znak” 1984 nr 10 アンジェイ・ワイダ「なぜコルチャックか?」、雑誌 “形跡” 1984年10号
- 2 8 Wojciech Pomianowski, Wajda dla „Życia” : - to nie paradoks, „Życie Warszawy” 1990 nr 69 ヴォイチェフ・ポミアノフスキ「“生活” のためのワイダ—これはパラドクスではない—」、雑誌 “ワルシャワの生活” 1990年69号 ; Tadeusz Sobolewski, Trudny Korcza, „Życie Warszawy” 1990 nr 271 タデウシ・ソボレフスキ「困難なコルチャック」、雑誌 “ワルシャワの生活” 1990年271号 ; Konstancy Gebert, Trudny Korczak, „Życie Warszawy” 1990 nr 276 コンスタンテイ・ゲベルト「困難なコルチャック」、雑誌 “ワルシャワの生活” 1990年276号 ; Wanda Wertenstein, Nie lubię słowa „grać” . Rozmowa z Wojciechem Pszoniakiem, „Kino” 1990 nr 10 ヴァンダ・ヴェルテンステイン「“演じる” という言葉は好きでない。ヴォイチェフ・プシオニアクとの対談」、雑誌 “映画館” 1990年10号
- 2 9 Tomasz Jastrun, Nie było śpiewu. Rozmowa z Michałem Wróblewskim, „Życie Warszawy” 1992 nr 186 トマシ・ヤストルン「さえずりはなかった。ミハウ・ヴルブレフスキとの対談」、雑誌 “ワルシャワの生活” 1992年186号
- 3 0 Stanisław Żemis(スタニスワフ・ジェミス)の他に、Janina Ładoszowa(ヤニナ・ワドシヨヴァ)秘書、Igor Abramow-Newerly(イゴル・アブラモフ・ネヴェルリ) 会計係、dr. Józefa Wodyńska(ユゼファ・ヴォディインスカ博士)、Marek Arczyński(マレク・アルチインスキ)、Janina Sendlerowa(ヤニナ・センドレロヴァ)、Wanda Drodowska(ヴァンダ・ドロドフスカ)、Ida Merżan(イダ・メルジャン)、Lamotowa(ラモトヴァ)、Ludwik Oliszewski(ルドヴィク・オリシエフスキ)らが委員会の創始者であった。参照 : Komitet uczczenia pamięci Janusza Korczaka, „Biuletyn RTPD” 1947 nr 2-3 「ヤヌシュ・コルチャックの記憶を称える委員会」、 “RTPD紀要” 1947年2-3号
- 3 1 Stanisław Żemis, Dedykacja スタニスワフ・ジェミス『献呈』、同上
- 3 2 これは、Ertepedowcy仲間 (Towarzysze Ertepedowcy) というテーマに関する解説・声明の一つである。「[...]赤い旗が私たちの旗であるということ、そして社会主義的教育が私たちの理念であるということ、私たちは忘れてはいけない」参照 : Stanisław Żemis, Nasza postawa wobec klasy robotniczej, „Biuletyn RTPD” 1947 nr 7/8 スタニスワフ・ジェミス「労働者階級に対する私たちの態度」、 “RTPD紀要” 1947年7/8号。これを基に、協会の教育的構想を共同作成した別の作者は特に次のように記した : 「バルトシツェに関する学術研究の課題は、社会主義精神において子どもや青少年の教育過程を最も早める要因を明らかにし、それを役立てることでなければならない」。参照 : Aleksander Lewin, Aktualna problematyka i organizacja badań naukowych w Centralnym Ośrodku Wychowawczo Społecznym im. J. Korczaka w Bartoszycach, „Biuletyn RTPD” 1947 nr 9-10 アレクサンデル・レヴィン「バルトシツェのヤヌシュ・コルチャック記念社会教育中央本部における現在の問題と学術研究組織」、 “RTPD紀要” 1947年9-10号
- 3 3 B. Milewicz, Nomen et omen, „Biuletyn RTPD” 1947 nr 9-10 B. ミレヴィチNomen et omen, “RTPD紀要” 1947年9-10号
- 3 4 ワルシャワの新公文書記録保管所 (Archiwum Akt Nowych w Warszawie、略称AAN)、教育省グループ (zesp. Ministerstwo Oświaty)、283番281巻、RTPDの全活動を調査するために組織された教育省の委員会 (Komisja Ministerstwa Oświaty) の議事録。タイプ原稿、sine loco et anno、11ページ
- 3 5 ミハウ・ヴルブレフスキは (前に引用したT. ヤストルンとの対談(28)の中で次のように述べている。「1953年にヤヌシュ・コルチャックの本が学校図書館から撤収された。これまで至る所を探してきたにも関わらず、その証拠を見つけ出すことができなかった。老博士の作品は、次にあげるような図書館から撤収された文献を記す目録には載っていない、“即時撤収の対象となった文献目録” ワルシャワ1951年、“公共図書館の蔵書査定委員会の調書、1954年4月~1955年12月”、“撤収刊行物査定委員会の調書、1954年9月~1956年1月”。しかしながら、1954年10月から1955年12月の期間の、教育省内にある学校図書館・教育図書館の文献選抜・精選委員会の調書を見つけ出すことはできなかった。ワルシャワにある新公文書記録保管所には列挙した文書が存在する。)*
- *紹介・訳者注 なお、特にこの問題に関して執筆したタイス教授の論文もある。以下を参照。「禁書目録に掲載された老博士」(Przegląd Powszechny, nr2, 1997, s. 218-228)
- 3 6 Aleksander Lewin, Problemy wychowania kolektywnego, PZWS, Warszawa 1953, s. 4 アレクサンデル・レヴィン「集団主義教育の諸問題」、PZWS、ワルシャワ1953年、4ページ

- 37 A. Szumski, Działalność ofiarna, ale pełna sprzeczności (W X rocznicę śmierci Janusza Korczaka), „Głos Nauczycielski” 1952 nr 32-33 A. シュムスキ「献身的活動、しかし多くの矛盾をはらんでいる (ヤヌシュ・コルチャック死後10年を記念して)、雑誌“教師の声” 1952年32-33
- 38 AAN, zesp. Ministerstwo Oświaty, syg. 7185, s. 240 ワルシャワの新公文書記録保管所、教育省グループ7185番、240ページ
- 39 Matylda Temkin, Dlaczego zapomniano o Starym Doktorze?, „Głos Nauczycielski” 1956 nr 21 マティルダ・テムキン「老博士はなぜ忘れ去られたか?」、雑誌“教師の声” 1956年21号
- 40 AAN, zesp. Ministerstwo Oświaty, syg. 283, t. 282 ワルシャワの新公文書記録保管所、教育省グループ283番282巻、コルチャック委員会 (Komitet Korczakowski) の活動に関する情報の記録、タイプ原稿、sine loco et anno
- 41 ミハウ・ヴルブレフスキは1969年スウェーデンに移民した後、そこでヤヌシュ・コルチャックの人物像や教育学を広めるのに一役かった。またスウェーデンコルチャック委員会を設立した。参照：Sven G. Hartman, Janusz Korczak and The Century of the Child, „Scandinavian Journal of Education Research” 1994 No. 2 「ヤヌシュ・コルチャックと児童の世紀」、 “スカンディナヴィア教育研究雑誌” 1994年2号
- 42 Tomasz Jastrun, Przemówienie dyrektora Instytutu Polskiego w Sztokholmie, „W Korczakowskim Kręgu” 1992 nr 32 トマシ・ヤストゥルン「ストックホルムのポーランド研究所所長のスピーチ」、雑誌“コルチャックサークル” 1992年32号
- 43 Wiesław Theiss, Pokłosie wydawnicze Roku Korczakowskiego, „Przegląd Historyczno-Oświatowy” 1981 nr 2 ヴィエスワフ・タイス「コルチャック年公布の結果」、雑誌“歴史・教育的展望” 1981年2号
- 44 Henryk Grynberg, Duch ludzki jako sierota, w : H. Grynberg, Prawda nieartystyczna, O.W. „Almapress-Czeladź”, Czeladź 1990, s. 117 ヘンリク・グリンバーク『孤児としての人間的精神』: ヘンリク・グリンバーク『美的でない真実』, O.W. “アルマプレス - チェラチ” チェラチ1990年の117ページより
- 45 Wanda Leopold, Janusz Korczak redivivus, „Twórczość” 1958 nr 7 ヴァンダ・レオポルド「生き返ったヤヌシュ・コルチャック」、雑誌“創作” 1958年7号
- 46 Stefan Bratkowski, Kto nam przywróci Starego Doktora, „Gazeta Świąteczna” (dodatek „Gazety Wyborczej”) 1991 nr 168 ステファン・ブラトコフスキ「老博士を復活させるのは誰か?」、 “祝日新聞” (“選挙新聞” の付録) 1991年168号